

「本はなくなるか？」

文学部社会情報学専攻 ホットなシンポジウム

「社会情報学専攻大討論会」と銘打ったシンポジウムが

6月26日、文学部で開かれた。

副題もあつて、「6人の教員の初めての顔見せ興業」。

1年生向けのガイダンスを兼ねたものだが、

第1部のテーマは「本はなくなるか？」。テーマにひかれて、聴講した。

学生記者 西原香保里(経済学部5年) 十大須賀美加(文学部2年)

6年前、記者(西原)がまだ高校

生だったころ、クラスメイトの1人

が現代文の授業のときも英語の授業

のときも小型のシステム手帳のよう

なものを机の端に置くようになった。

その他大勢は分厚い辞書を置いてい

たのに。そのとき初めて電子辞書の

存在を知った。なんて便利なんだ、

とみなが思ったはずである。持ち帰

りは手軽で、ページをめくるよりも

早い。以来、電子辞書が机において

あるのを目にする機会が増えていつ

た。

いままで慣れ親しんでいた活字本は消え、電子本にとって代わられるのか――。

多様な視点

90分の授業時間の中で2部構成。

第一部「本はなくなるか？」の幕開

けは安野智子助教授。問題提起とし

て活字本と電子本の双方のメリット

を挙げた。活字本のメリットは携帯

性、保存性、一覽性にあるという。

「本は電車の中でも読めます。ま

た電子ファイルのように消えること

はありません。さらに、検索によつて一発で探している本をあててしまふより、探している本をさがすプロセスにおいて本場に必要な本がみつかることがあります」

一方、電子本のメリットは複写が容易なことやマルチメディアに対応できることなどになる。

続いて林茂樹教授は「本はなくなるのではなく、TPOに応じてオールドメディアとニューメディアがいかに棲み分けをするかという、相互補完的な関係になつてくる」と話した。いわば、「共存共栄論」である。これと正反対の立場をとつたのが宮野勝教授。

「本はなくなりません。新聞もなくありません」と断じる。

棲み分けはあるけれども、本や新聞は片隅に追いやられるという。「テレビが登場して、ラジオが片隅に追いやられたように」。それに、とつけ加えて、「本はなくなるけど、電子化されたものはあちこちに保存できるので、なくなるということはないんです。実際は本のほうが保存性

は悪い。本は数が増えると引つ越せないんですよ」。

松田美佐助教授は、個人的な見解と研究者としての見解を分ける。「個人的には本はなくならないと思います。うちには7歳と4歳の子供がいます。寝かしつけるために本を読みますが、子供でも赤ちゃんでも選べる『本の物体性』というのは強い」。一方、メディア研究者としての見解は、「将来的にはハリーポッターに出てくるような『動く本』が登場するかもしれない。本とはいえ、今と同じ本はない」。

それぞれに興味深いが、独立した見解なので、焦点が絞りづらい。コンテンツの電子化が主流になると、「本はなくなつた」ということになるのだろうか。

最後に回つてきた齋藤孝教授は、「本」の定義に立ち返つて論じる。

「本を論じるとき、『本』の定義が重要になります。『本』には2つの定義が考えられます。物理的なモノとしての『本』が第1の定義、概念としての『本』が第2の定義です」



写真左から、山崎教授、安野助教授、林教授、宮野教授、松田助教授、斉藤教授

第1の定義で「本」を考えた場合、今の「本」は、装丁があり、縦書きで、ページをくって読みすすめる様式、物理的なモノ、である。しかし、大昔から「本」がこの形態だったわけではない。歴史を遡ると、グーテンベルグが活版技術を発明する以前「本」とは羊皮紙に手書きされた筆写本、つまり、聖書だった。「本」が巻物だった時代、板だった時代もある。

一方、第2の定義、「概念としての本」とは、「様々な知識や情報を明示化するもの」。さまざまな現象を知識・情報として概念化し、明示する。そしてそれを読み解く。このような「概念としての本は減びません」。

議論がクリアになった気がする。コディネータ役の山崎久道教授の発言も興味深かった。

「紙で印刷したとき、情報が静止する。電子化すると情報が止まららない」

文章が絶えず「過去化」するような、情報の流れをどう記述するかという、

書く行為の本質論ともかかわってくるだろう。

話題になった佐野真一著『誰が「本」を殺すのか』は、本の世界の電子化を3通りに分けている。①オンライン書店に代表される出版情報や物流情報のデジタル化②パソコン等の画面で電子本を読む「オンスクリーン読書」③電子情報をそのまま印刷機に流し込み、注文に応じた部数だけを紙の本に作る「オンデマンド」出版、である。このような電子化が進めば、出版社や印刷会社、取次ぎ、書店といった本の流通経路は様変わりする。読者の本の接触の仕方も様変わりする。しかし、斉藤教授のいうように、「概念としての本は減びない」。要は、△本はなくなるし、なくならない▽。

このへんが結論のようだった。

重要な批判的思考

第2部は、林教授に司会が代わって、「社会情報学を学ぶと何の役にたつのか？」のガイダンス的な討論。

「人間は情報の質で行動が変わる

んです。情報の専門性があるところの分野でも活躍できます」（山崎教授）、
「私は社会情報学を学んで批判的思考が身につきました。世の中の情報は意外と証拠がいまいなものが多いんですよ」（安野助教授）、
「社会情報学の中の嫌いな科目に対し）好きな科目の隣の科目を学ぶという気持ちで関心意識を高めてもらいたいですね」（松田助教授）……。さらに宮野教授や斉藤教授からも、社会情報学の有用性と勉学姿勢についてのコメントが続いた。

林教授のまとめである。

「諸君たちには、先生方の前向きの指導に食いついてもらいたい。せっかく高い授業料を払っているのだから、何倍も吸収して欲しい。私は、今の大学生は批判的思考が足りないと思いますよ。もっと考えることを実践して欲しい。私が尊敬する政治学者の丸山眞男に『全てについて何かを知り、なにかについて全てを知る』という言葉があります。こういう気持ちで勉強を行ってもらいたい」